



## COVID-19 にもたらされた 学術集会のオンライン改革

九州大学 宮田潔志

COVID-19 の猛威により、世界を取り巻く状況は一変してしまった。日常的な研究活動もかつての在り方が難しく、多大な制限を余儀なくされている。特に大規模集会は実質的に開催不可能な状況に置かれている。外国との人の行き来はほぼ断ち切れ、国際学会も悉く延期や中止に追い込まれている。エネルギー関係の分野も例外ではなく、この状況下で如何にして知の探究を継続するか、という課題は共通であろう。

筆者がコアスタッフとして運営に携わっている化学ポータルサイト Chem-Station：通称 ケムステ（代表：山口潤一郎、副代表：生長幸之助）[1] では、いち早くオンラインでのシンポジウムを 5 月に開催し、大盛況に導いた。今でこそ学会・研究会のオンライン化が急速に一般化しつつあるが、先駆けて成功例を示せた点は意義が大きかったと自負している。産官学の読者に向けて発信される当ニュースレターの話題としても重要と考えたので、運営で感じたことを紹介しながら、今後の科学交流の在り方について一考する機会を提供したい。

第一回バーチャルシンポジウムは、2020 年 5 月 1 日に開催された。4 人のスピーカーの都合を合う日程を調整し、Zoom とリンクさせた YouTube Live で講演を登録者にリアルタイムで共有するというシステムで行った。質疑応答は YouTube のコメント機能を使って随時書き込んでもらい、質疑応答の時間にモデレータがピックアップして発表者に訪ねる形式をとった。緊急事態宣言で注目されていたことも手伝って、2700 人を超える登録者数があり Live でも常時 2000 人以上が視聴していた。種々運営上の課題も見つかったものの多くの発見もあり、総じて多くの方に満足の声をいただけた。

オンラインならではのメリットとして再認識した点はいくつかある。①運営コストの低さ、②誰でもどこからでも参加が可能、③チャットベースで視聴者同士のリアルタイムでの交流が可能 などだ。

会場費をほぼ必要としないため、オンラインでの学会と比較すると運営コストは著しく下がる。実働の運営 6 人で 2000 人を超える参加者をさばく会を 2 週間で準備するなど、従来型の学会では到底無理であろう。

参加者からのアンケートでは「会社では行ける学会に限られて歯がゆいことも多かったが、興味のある話題を聞いて満足」「家庭の事情で化学から遠ざかっていたが、自宅から最先端の研究の講演を聞いて徐々にわくわくできた」、などとともに状況的に学会等に参加できない層からの支持も目立った。学生、アカデミア、企業人等問わず、興味のある人のお茶の間までサイエンスを届けることに成功した実感がある。

また、リアルタイムで質問を共有できるため、参加者間で意見の交流や内容の確認がしやすい点も良かった。慣れた講演者は、リアルタイムで受けた質問に柔軟に対応して講演内容の喋りに反映させていた。

以上は、従来のオンサイト型学会には決して達成できない点であり、真の意味での知のオープン化・学際融合の突破口となる可能性も見えている。単なる従来型学会の代替を超えた、学術会議の新しい形式の一つになるだろう。一方、従来型学会はオンラインならではの良さも追求し、上手く差別化していく必要もでてくると思う。

最近では、光機能に特化したバーチャルコロキウムも九州大学の有志と発足させた[2]。コロナ禍を契機に社会に起きた変化を上手く味方につけ、学びを止めないどころか、寧ろ“加速”させる。それを達成することが、我々の COVID-19 に対する勝利と定義しても良いのではないだろうか。

[1] <https://www.chem-station.com/>

[2] <https://www.molecular-photoscience-q-colloquium.com/>